

(報 告)

『野口英世書簡集』の編集を担当して

Education of “Collection of Hideyo Noguchi’s Letters”

水 野 雅 美
Masami MIZUNO

財法人 野口英世記念会は、去る平成元年 8 月 23 日に創立五十周年を迎え、その記念事業のひとつとして、『野口英世書簡集 (I・II)』を刊行することができた。

この書簡集は、(I)と(II)の 2 冊で構成され

(I)には英世が邦文でやりとりをした書簡(英世を書いたもの。英世が受け取ったもの。英世が日本人と英語でやりとりをした手紙の邦訳文)を主に収録し、年代順に編集したものである。

(II)には、英世が欧文で書いた書簡(電報及びタイプで打たれた手紙を含む)を収録し、やはり年代順に編集したもので、この度の編集では、“英世宛に出された手紙、受けとった手紙”は収録することができなかった。そして、一筆コメントを加えるとすれば、(II)の欧文書簡集は(I)の邦文書簡集を欧文化したものではなく、実際に英世が生前欧文で書き記したものであるという事をご承知いただきたい。

今回のこの拙文では、(I)の邦文書簡集を中心に述べてみたい。

この度の書簡集の刊行の目的は、野口英世が 51 年の生涯(清作の頃を含む)で書いた書簡、受け取った書簡を一通でも多く発掘し、その文面で使われた字で収録することにより読者、研究者の方々に通一通の書簡を正確に伝え、まだまだ不明な点の多い野口英世の生涯を解き明かす資料集を残したい、というところにある。

これまでに出版された書簡集で代表的なものとしては、

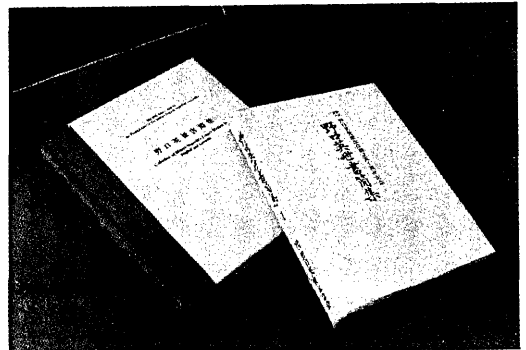
○『野口英世の手紙』(138 通収録) 宮瀬睦夫著 愛亜書房 昭和 18 年刊

○『野口英世～その生涯と業績～書簡』(358 通収録、電報 23 通を含む) 丹 実著 講談社 昭和 51 年刊

今まで出された伝記や評論、読物の多くはこの 2 冊の書簡集にその資料的根拠を求めたと言っても過言ではない。だが残念なことに、2 冊とも出版されて年月も経て、

現在では古書店にもその影すら見ることができなくなった。つまり、この 2 冊が身近に見る事ができなくなってからは、野口英世の研究者、伝記作家、医学史研究者といった方々にとっては執筆上の資料的根拠や裏付けを得ることが、非常に困難であったと強く推測できるのである。この度の書簡集の刊行で、今、掲げた研究者のみならず、広く一般の方にも英世の生涯を理解していただく資料集の一冊として、また座右の書として活用されることを切に願うものである。

書簡の編集にあたり、上記の 2 冊の代表的書簡集に収められている書簡をもう一度、一通ずつ読み返し、原物の手紙や写真で残されている資料と参照し、再確認していく仕事から始めた。ただし現実問題として参照すべき資料の多くは、関東大震災、第二次世界大戦といった大災害や諸々の理由により、その文面を確認できなくなったものも少なくない。幸いにこの度の出版にあたっては、この既刊の 2 冊の書簡集に収録されている書簡を、基盤とさせていただくことを御許し下さり、これに昭和 51 年以降、約 14 年間で確認することのできた書簡を追加収録することとした。そして、一通でも多く収録するという



*みずの まさみ

連絡先 (財)野口英世記念会

〒160 東京都新宿区大京町26

目的から、時間的に本編に、組み入れられなかったものに関しては、巻末の補遺部分に掲載した。また、宮瀬氏書簡集、丹氏書簡集のほかに参考書簡集をあげるとすれば、昭和16年に刊行された橋輝政著『野口英世書翰と母の生涯』(40通収録)である。

本会の書簡集と丹氏書簡集と大きく異なる点は、丹氏の書簡集では英世が晩年に西アフリカのアクラから、ニューヨークのメリー夫人に打電した英文電報の文面と、その訳文が巻末に収録されているが、欧文電報の中には、メリー夫人以外の人に宛てたものもあることから、本会書簡集では、(I)の邦文書簡集には丹氏書簡集と同じようにメリー夫人に宛てた電報と訳文を、そして(III)の欧文書簡集には、電報も1通の手紙に相当すると考え、英世が打電した電報の文面を原文のまま、年代順に収録したことである。もう一点は、英世の死後、恩師の小林栄先生と小説家・坪内雄蔵氏(=遺逸『当世書生気質』作者で、英世はこの小説を読み、登場人物の“野々口精作”にショックを受け、清作から英世へと改名した。)との間でやりとりされた、英世改名のいきさつについての往復書簡を収録したことである。

つぎに、収録した書簡の数を見ても、書簡集(I)には364通を、そして書簡集(III)には323通(電報を含む)を収録することができた。その(I)の内訳は、

- ◇ 英世が出した書簡……………213通
- ◇ 英世宛の書簡……………148通
- ◇ その他の書簡、随筆……………3通

となっている。このように膨大な数の書簡が残された理由を考えていると、

- ①英世が生きた時代(1876~1928)は、現代のように電信、電話、ファクシミリといったような通信機器はまったく普及しておらず、唯一、手紙のやりとりだけが、重要な通信手段(英世の晩年には電報も登場する)とされたため、当然、手紙の数も多く、また一通の手紙の文面が非常に長いものもみられる。※ちなみに、猪苗代~ニューヨーク間のかかる日数は、明治後期で30日前後、大正後期で20日前後かかっていたことが、出した日付けと押してあるスタンプにより推測できる。
- ②英世が生涯、素晴らしい友達、同僚、恩師(恩人)、研究者に恵まれた事であろう。これは、英世が周囲の人々から欠けがえのない人物として、また友として誇りに思え、そして、言葉で言い表すことのできない、不思議な人間的魅力を英世が持っていたからではなからうか。そんな魅力があったからこそ、受取

人が、英世からの手紙を読みえた後も、処分せずに保管し、特筆すべきことは、英世が細菌学者として世に知られてからでなく、無名の青年時代、上京時代、渡米初期の頃の手紙を、大切に保存されておられる奇篤な恩人、友人に囲まれていたことである。また、書簡集を作るにあたり、宮瀬版、丹版、橘版の書簡集を基盤としながらも、忘れてならないのは、英世が死んで60年経った今も、やりとりをした書簡を大切に、何代にもわたって大切に保存されてこられた、個人所蔵者がおられたことである。そして、その所蔵者の方々が、今回の書簡編集にあたり、財団法人野口英世記念会を信頼して下さり、また本会事業をご理解下さり、公開することを快諾されたこと、また、個人所蔵者のところに到達するまでの、“道”を教えてくれた数多くの影の協力者がおられたことも、見逃すことはできない。

次に、実際の編集作業上で気が付いたことを述べてみたいと思う。

まず活字化するにあたり、文字をどのようなルールの下に使い分け、編集していくのかということが、始めから終わりまで大きな課題となった。

英世が手紙のやりとりをした、明治中期、大正年間(昭和初期)の頃は、平仮名、片仮名、変体仮名、漢字(旧漢字、正字)をいろいろと取り混ぜて使い分けており、手紙の文面を苦勞して解読しても、印刷会社の方で、その字がなかなか見つからなかったり、今では殆ど使うことがなくなったため、電算の辞書からはずされていたり、といったことから最初の一步からつまづいてしまった。手紙の中で、くずして書かれた文字は、その手紙を書いた差出人に忠実に従うことを心掛け、なるべく、漢字も略された今の漢字ではなく書かれた当時使われていたと思われる漢字を採用し(作ってもらった漢字も相当あり)変体仮名は平仮名に、片仮名はそのまま片仮名を採用していくことをスタッフ、業者ともに確認した。

また、手紙の文面を読んで見ると、一行一行流れるように字がくずされて書かれているため、現在使われている常用漢字を書いているのかの如く見えるが、明治・大正期には今の常用漢字などあるはずもなく、もう一度、字を調べて手紙の書かれた字を採用していくという、ひとつの文字に対する判断も難しく、校正が進むごとに編集スタッフが意見を出し合って決めていった。

そして判読不可能の箇所には、文字の相当数の○○○を入れて、今後の解釈を待つこととした。

また、手紙の文面にはしばしば、誤字や脱字と考えられるものや、熟語では、現在このような漢字の組み合わせ

せの熟語は見当たらない、といったものも数多く見られたが、その書簡の書かれた状況や、筆者の心境が、使われているその字をそのままにして置くことにより理解できるものもあるので、下記の例の如く、訂正した文字がわかるように [] で明記した。

推撰 [薦] 特兆 [徴] 猪苗代一體 [帶] 大恐皇 [慌] 信切 [親切] 熟注 [中] 御面 [免] 管短 [簡單] 弁理 [便利]

とほんの一部であるが、このようになっている。それでは、何故このような使い方をしたのだろうか。

- ①執筆者が知らないで間違って使ってしまった。
- ②その当時は今とは異なった漢字および熟語の使い方を日常していた。
- ③執筆者は本当は正しい使い方を知っていながら、意識的に字を変えて使うことで、前後の文章や自分の気持ちを強調したり、洒落（言葉の遊び）のつもりで使っていた。

という理由が考えられた。

述べるのが最後になってしまったが、野口英世の書簡を読んで、編集者のひとりとして非常に感心したのは、日本から離れアメリカで生活していた英世が、日本人に送る手紙には、日本人としての自覚を忘れず、文末の年号には必ず日本の「元号」を使い続け、そのため、年号の思い違いをしてしまったこと。そして、ここまで多くの書簡が確認でき、また、今では見るのできなくなった書簡の収集・校正ができた「背景」には、英世の上京時代からの大親友・石塚三郎（本会三代目理事長）が、集まった書簡を一通一通、丹念に写真に撮りガラス乾板で残して下さったことに触れなければならない。

あとがきとして、書簡集の編集を担当し感じたことは、この仕事を始めた頃には、とにかく現在までに確認できている書簡、新しく発掘できた書簡、確認できていたが今まで未収録であった書簡を一通でも多く、正確に活字化し、収録することにエネルギーを注いだ。

次には、読んだ書簡を年代順に並べる作業を手掛けた。集まった書簡には、日付けが書かれていたが、年が書いてないもの、封筒のないもの（当然ながら消印がない）もあったため、手紙の文面や内容から年代考証の手掛かりを捜し、その根拠とした。

そして、文字を組んでもらい初稿が出ると、今度は先に述べた、使用すべき漢字の選択が一番時間を要した作業であり、何度も出版社の方とやりとりをしたため、校正も4稿、5稿にも至った。その校正が進むにつれ、一通、一通の書簡の文面に英世を巡る人々の関係や立場が

見え、またそれだけでなくその書簡の書かれた頃の、社会・経済・医学・文化・郵政事情・教育といったいろいろな情報をキャッチすることができ、これも、当時の限られた意志の伝達手段として、手紙が重要であったことを改めて認識させられた。

また、前に述べた既刊の3冊の書簡集を前にして、世に埋もれている書簡を発掘するために、いろいろな印刷物に目を通し、些細な情報にも耳を傾け、追い駆けていくことも実際の作業上、楽ではなかったが、特に「財団法人 野口英世記念会」という少なくとも、野口英世の家元というか、本家というか、元祖と世間から思われている団体から刊行する書簡集、というプレッシャーから、本文のみならず、序文、目次、索引、年賦、奥付まで自問自答を繰り返しては読み直しをして、ハードルを越えていったため、全体の作業速度は遅くなってしまった。

また此度の書簡集の印刷・出版を担当した明德印刷出版社の小澤氏、RPプリンティングの長沢氏の両氏より、多大な御協力御配慮をいただいたことも記しておかねばならない。

野口英世というと、もうすべてを知り尽くされ、研究の余地なしと思われがちであるが、日常送られてくる質問にも、あいまいな返事や解答しかできないものも多く、その不勉強、怠慢には返す言葉もないが、まだまだこれから研究していくべき部分の多い細菌学者である。それは、一番活躍した人生の後半を海外で過ごしたということで、今までは逃げてしまえたが、これからはいままで未発表であった英文書簡232通も発表したことにより、徐々にその研究を進めていく所存である。この2冊の書簡集が、野口英世の研究者、伝記作家のみならず、広く、深く気軽に一般の方にも野口英世の生涯を裏付ける資料としてにひもとかれることを、心より願うものである。

尚、最後に、本稿発表にあたっては、本会専務理事・関山英夫及び図書資料担当・丹実の協力を得ることができたことを心から感謝したい。